

夏の夜話

近藤 雅之

夏がくると夏の夜空が話題になるのはなぜだろう。冬になって冬の星なんてきかれることは滅多にない。実のところは日本では、秋深くから冬いっぱい星を見る季節である。天文台では申し込みで望遠鏡の時間を分けるのだが、観測所によっては十月から三月までしか割り当てない位である。

寺田寅彦先生に涼み台の随筆があり、教科書にも

出ていた。昔は暑さ凌ぎに日の落ちたあと縁台で団扇片手に話に興じた。そういう時に星も見た。寒天に星を眺めるのは病の昂じた人だけである。こういう様子はエアコンがふえて消えただろう。大体夏の夜は短くて、星の見え始める時刻がおそく、子どもむきではないのである。

東京の空では星がよく見えなくなってしまつて長

い。東京に限らない、夜空を照らす灯りの数は全国にふえている。光害を減らして夜空の自然をとり戻そうという標語は、痴漢に注意とか街を明るくとかの看板に負けそうである。それに海岸でも泳ぐのはプールというのと似て、結構星の見える所にプラネタリウムがあつたりする。プラネタリウムや民衆天文台の普及は驚くほどである。

さて子どもはプラネタリウムで何を見るのだろう。昔の縁台では大人達は熱心な子どもの質問にすぐ追いつかなくなった。その点プラネタリウムなら安心である。昔のプラネタリウムは子どもに星の名をいわせたりして虚栄心をくすぐった。この頃はずっと高級なシナリオで進行しているから、そんなことをしている時間はないだろう。スペクタキュラーな現代プラネタリウムの上演効果は圧倒的で素朴な疑問など消しとんでしまいうさである。子どもも期待するのは知的好奇心といえるが、それに答

えるという意味で、今が昔に勝ると簡単にいえるかどうかわからない。情報の量は較べ物にならないが、昔は好奇心に素直に対していたのに、今は子どもに限らない層の芸術的感興をねらっているようである。

子どもに一時期天文好きが多いのは確かである。プラネタリウムに通つたり、本を読んだり、望遠鏡をねだつたりを経過して、かなりの人は別の対象に興味を移してゆく。好奇心の対象とすれば当然のことである。昆虫採集とか切手とか、今はゲームも計算機もある。星好きは一過性の趣味のひとつであることが多い。そこを乗り越えて天文に踏み停つた人は、天文ファンになって長くつきあうことになる。

天文の雑誌というものが何冊も出たのは、戦争後のことで、天文ファンの数は何倍も増えている。綺麗な写真を楽しむ人も、彗星を捜す人も、計算を喜んでしている人もいる。大学で天文学を専攻する人

には逆に幼時からの天文好きでない人もいる。数学が好きで理科に入った、製図が嫌で理学部天文にきたという類や、物理に入ったけどモダンな天文の本を読んで宇宙の問題を考えなくなったという類、うっかりすると北極星もわからない人もいる。人工衛星^があがり、物理学者が赤外線やX線の観測を始めてからそういう志望者が増えた。

天文ファンもいろいろである。熱心に晴夜を求めて遠くまで出かける人、専門書をあさり歩く人、鏡を磨く人は昔からいたが、パソコンやエレクトロニクスの専門家も当然いる。専門の実力を天文に生かしている人は、物理で赤外線やX線の技術を修得して天文をやる人と紙一重である。それで昔のプロとかアマの境は相当曖昧になってきている。研究結果だけが問題だといえればそれで当然である。

さて単純素朴に星空を見るといいう話に戻ってみ

る。一番星見つけたというような情景が今あるかどうかわからないが、歴史的にいって日本で星空への関心が大きかったとはあまり思えない。例えば天界の様子を語った文学は新村出先生の南蛮更紗以来、星はずばるや、建礼門院右京大夫よりあまり増えないようである。星の名こそ本にした人もあるが、星座となると、中国か西洋となる。星座は天文学の実用面で発達してきたので、自分で暦を作らなかつた日本では、暦と組んだ輸入品が普及、それも星座の方は暦のように民間に広まることもなかつた。空を見ることは遊び以上のものなのである。世界にはこのように星への関心の低い文明があるようで、太陽暦を作ったエジプトも、ナイル氾濫を知るためシリウス（大犬座^{アルファ}星）を観測したほかは星座など伝わっていないようである。

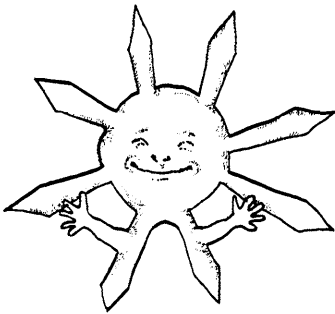
いろいろ並べてみると子どもの知的また感性的教育にとって星空の鑑賞が必須なものだなどとても思

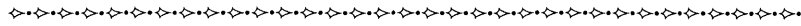
えない。たまたま綺麗な星空を眺める機会があれば大人もいっしょに美しいと思えばよい。それをどのような機縁に転ずるかは人による。シャーロック・ホームズだって美しいと位は思うのだろう。

ところで夏の夜空というと七夕、織姫と彦星の話など今時の子どもは聞くとおもうえない。しかし、七月七日はともかく、夏中頭の上に明るく見えているのは織姫である琴座 α 星、西洋の名をヴェガという最初に距離の測られた星のひとつである。赤道より北の星では一番明るくて目につく。この星が近年また話題になったのは赤外線を測ったら星のまわりにダストの塊があることがわかったからで、これは原始惑星系が出来るのではないかと思われている。ヴェガの東南に銀河をさしはさんで牽牛 Π アルタイル、わし座の星がある。東すこし北の銀河のなかに白鳥座 α 星のデネブがある。アルタイルの方にのびた三角形だが明るい星ばかりで見つけ易い。デネブ

は白鳥のおしりで、首の先はちょうどヴェガとアルタイルの中間の方にのびし、羽は両側に拡げている。大体は東に向いて頭上に近いのがヴェガ、それから東に三角形がある。

天の川はこのあたりから南にとうとうと流れ落ちてゆく。よく天の川の見える夜ならば南にゆくにつ





れ、銀河の幅が広がり、明るくなっているのがわかる。一番明るいのが、射手座、さそり座、へびつかい座の境界あたりである。黄道十二星座というけれど、現行の星座の境界線でいうと、黄道はさそり座の部分は少なく、へびつかい座の方が多い。それなのにへびつかいは疎外されてしまった。もちろん占星術の方でも天蝸宮、人馬宮、魔蝸宮でへびつかいは入っていない。そこらがいい加減なのは中国の二十八宿も同様で、黄道を北へ南へよろけて配置されている。たとえば昴宿（すばる）は黄道に近いけれど、参宿はオリオンの三つ星だから赤道上で、黄道とは20度以上離れているという塩梅である。宿には当然ある程度の拡がりがあるのだが、参から黄道までにはほかの名の星がいっぱいあるのである。

オリオンが見える時はさそりは見えない。その逆ももちろんのこと。中国では“人生相見ざることもやまずれば参と商の如し”などとうたわれる。商と

いうのは、さそり座の α 星アンタレス（中国名を大火）のあたり心宿の古名である。ANTARESは火星（ARES）に対抗するものの意、その通り赤い超巨星である。両側に三等星がついてしまった天秤棒のようで商となにかで読んだ気がする。左伝では、仲の悪い兄弟を離れて住ませた、その一方が商丘という所でこの星を祀ったのでそれが星の名になった、他方が参だというのである。織姫が天頂にかかる頃にはもう西へ行きかけている。“寒蟬敗柳になき大火西に向かいて流るる”といわれる形である。

ところでこの辺にはもうひとつ有名な中国詩がある。詩といっても賦といわれるが、“しばらくありて月は東山の上に出で斗牛の間を徘徊す”という、斗はすなわち射手座の南斗六星、牛は牛宿で山羊座の尾のあたりである。南斗六星は北斗七星ほど明るくも大きくもないが、口を南に伏せて柄を西にのぼ

した形はわかりやすい。

このあたり銀河は明暗交った複雑な流れを作っている。斗宿と心宿の真中辺が、銀河系の中心である。光ではレンズの面内を見る形で、厚板ガラスを面内の端面から覗くと青黒くて先が見えないのと同じで、見透しが効かない。遠赤外や銀波ではずっと見透しがよく余り大きくなく、活動的な中心部が見える。

明るいカメラでこの辺を含めて広い写真をとると、天の川というよりは、真横から見た渦巻銀河のように見えて驚かされる。銀河系のような渦巻銀河では平面に広い渦巻きの中心部には球状のバルジとよばれる部分がある。うまくとった写真では銀河バルジが立派にうつり、楕円銀河のように見えさえる。銀河はこのふたつの種類に大別できるのだが、なぜそのふたつしかないのか、どういう風に生まれ育ったかはまだわかっていない。全然違う物のよ

うなのが、渦巻きの中心に楕円銀河的なものがあるとする、これは誕生の秘密に関係するかもしれない。大体いずれの銀河でも中心には重力崩壊したブラックホールがあり、そのまわりでの重力エネルギーの解放が銀河活動の源泉らしいと思われるようになっていく。

一晩中観測を続けられた朝の楽しいことは格別である。疲れも実に心地よい。そして鳥の声。夜半にも冬は水鶏とか、夏は慈悲心鳥にききほれることもあるが、暗いうちの虎つぐみに始まる数々の声には、眠りにつく前にやすらぎと翌晩への希望を与えてくれるものがある。多分早起きして聞くのよりもっと良いのだろうと思っている。

(天文学研究者)